

# 山口大学 埋蔵文化財資料館だより

No. 1  
〔創刊号〕

山口大学埋蔵文化財資料館

ご存じですか？

山口大学の構内が、『遺跡』であること。

吉田キャンパスだけではありません。

道を隔てた向かいの附属養護学校、

山口市街地の白石にある附属幼稚園・小・中学校、

光市室積浦にある附属小・中学校、

宇部市小串の医学部にも、

その土地の歴史が埋もれているのです。

発見された太古の道具や  
容器の数々は、ここ  
埋蔵文化財資料館で  
公開しています。

## 創刊のごあいさつ

埋蔵文化財資料館が、大学構内の埋蔵文化財の調査・研究・収蔵および公開展示等を主要業務とし、共同利用施設として開館以来、今年で10年目を迎える。この間、当館の運営に助力を惜しまれなかった関係各位に、深く感謝の意を表したい。これを一つの節目にし、当館の充実期としてなお一層、研究・調査に邁進すべく館員一同決意を新たにしている。

埋蔵文化財の調査・研究は、極めて実証的な学問領域といえよう。遺跡から導き出せる具体的かつ客観的な情報は、史実の再構成・検索に重要な位置を占めている。今後は特に、埋蔵文化財が単なる過去の遺産ではなく、現在の我々の日常生活に深く結びついており、また将来の生活手段を教えてくれる道標になり得ることを、より多くの人々が再認識できるような環境づくりを第一目標に掲げ、今後とも努力を重ねていく所存である。その一環として、企画展の年2回開催を計画しているが、加えて、館報として「埋蔵文化財資料館だより」を季刊で発行することとした。当館が広く活用される契機となるよう、平易でかつ充実した小冊子を志向している。忌憚のない御意見をお聞かせ願いたい。

これからも引き続き当館への御理解・御協力をお願いして、創刊のごあいさつとしたい。

埋蔵文化財資料館 館長 黄 基 雄

## 埋蔵文化財資料館のご紹介

当館は、学内の誰もが自由に利用できる施設です。

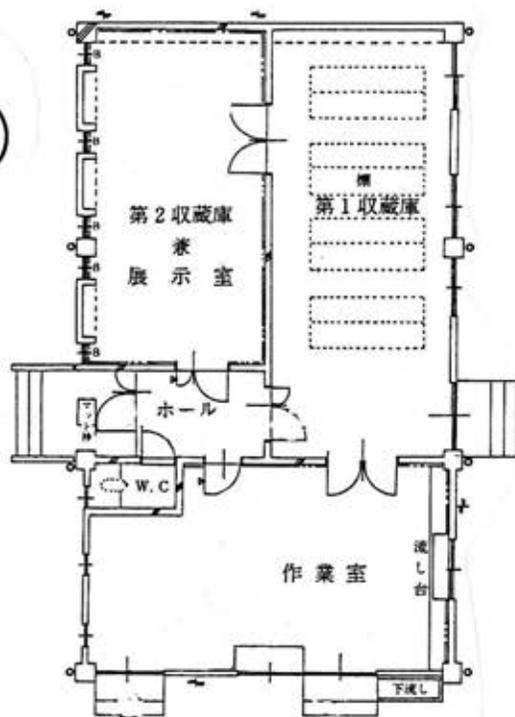
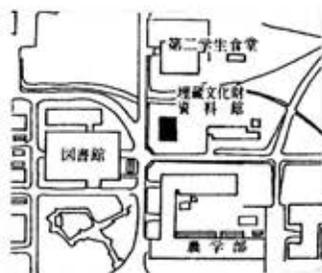
### ☆沿革

- 昭和41年 吉田の地への大学統合移転が始まり、教育学部 教授 小野忠熙氏により吉田遺跡の調査開始。
- 昭和42年 吉田遺跡調査団 設立 (団長 学長力武一郎、調査担当 小野忠熙)。
- 昭和52年 遺物の収蔵庫として、埋蔵文化財資料館 竣工。
- 昭和53年 構内遺跡調査要項 (埋蔵文化財資料館規則、同館運営委員会規則) 制定。
- 昭和54年 助手1名、事務補佐員1名 配置、吉田キャンパス内の調査・研究開始。
- 昭和58年 教務補佐員1名 新たに配置。小串(医学部)・常盤(工学部)・亀山(山口附属幼稚園・小・中学校)・光(光附属小・中学校)をはじめ、大学諸施設敷地でも埋蔵文化財の調査を開始し、新たな遺跡が発見される。

### ☆主な業務

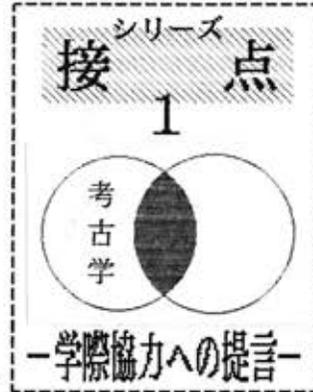
- \* 大学構内等から見つかった埋蔵文化財の収蔵・展示および研究。
- \* 大学構内等の遺跡を発掘調査し、その成果を報告書として刊行。
- \* 関係図書・写真・スライド等の貸出。遺物の貸出、試料としての供出。

### ☆資料館の位置と平面図



大学構内から掘り出された  
太古の遺物を展示しています。  
発掘時の写真やスライドの  
貸し出しも行なっています。  
図書館と同じ気持ちで  
気軽にお立ち寄り下さい。

考古学研究者は、人類の歴史発展の諸様相解明を主目的とし、研究の一手段として発掘調査を行なう。過去の人々が手を加え、日常生活を営むうえで有効な利器として変容させた土器・石器等の「もの」や竪穴住居跡等の構築物への総合的な分析の必要性からである。歴史科学のなかで「最も古いところから最も新しいところまで最長の時間幅を取り扱うことが可能な学問が考古学」と言われて得られる成果は考古学が研究にとどまらず、時代・性格の異一例をあげれば、埋葬跡から日本人の骨格・体型および細部人類学、解剖学の有効な基礎資の古人骨に病巣が発見された場威力を発揮する。また、食物学、形質変化の一因子である食生活を中心にした日常の生活環境、婚姻等による社会環境の変化の過程が研究資料となることであろう。上記した以外にも、遺跡の発掘および考古学は、種々の学問分野に資料を提供し、研究の一端を担うに足るものであると確信する。



え、そのため発掘調査の過程対象とする「人為的な痕跡」なる様々な情報集合体である。発見される各時代の古人骨はの形質変化の過程を反映し、料となっている。さらに、それは病理学の研究資料として社会学、地理学等の分野では、

他の学問領域からの示唆は、常に新鮮で、貴重である。発掘調査や遺物整理の過程で種々の情報が cross-faculty に加味されれば、新たな研究分野の開拓と同時に考古学的データもより汎用できる場が開けるはずである。このシリーズでは、諸科学と考古学との接点に目を向け、実際に行なわれている共同研究の成果を取り上げてみたい。学際協力への糸口として、遺跡発掘の成果を各分野の研究に生かす手段として、当館の果たす役割、有効性について考えていきたい。【次号は…『物理学と考古学 一年代測定』：<sup>14</sup>C】

◆期間：5月18日～7月31日◆

## 企画展『土から生まれた容器』開催中。

山口大学の構内から見つかった、歴代のうつわたちが、一堂に会しています。直接自分でさわってみることができるように展示しています。ぜひご来館下さい。

◆展示の一例◆ 盛りつけ用のうつわ、火にかけて煤だらけになったうつわ、食料貯蔵用のうつわ、指紋が残っているうつわ、塩作りのうつわ、粉あとがついたうつわ、赤く塗ってあるうつわ、墨で文字を書いたうつわ などなど。実験コーナーなども設けてあり、自分の手に取り、確かめながらうつわの歴史を辿る、一味違う展示です。



〔土曜日午後と日曜日は休館〕

## Q & A なぜ土に埋まった歴史《埋蔵文化財》を発掘調査するのでしょうか。

土に埋もれている文化遺産《埋蔵文化財》とは、決して「もの」だけではありません。一つの土器を入念に調べても、形や作り方はわかるとして、何に使ったかまでを知るのは至難の業。しかし、その土器が、例えば、焼けた木炭と一緒にカマドの上で発見されたら、火にかけて煮炊きに使われたことが一目瞭然です。このように、「もの」と「場所」は切っても切り離せない関係。『どんなものが、遺跡の中のどこに、どのような状態で埋まっていたか』を正確に調べるのが発掘調査です。これによって当時の人々の暮らしがわかり、そして現在までのうつりかわり、すなわち、歴史の流れを握むことができます。

『確かなもの』。今、どれだけあるでしょう。歴史の流れの確実な記録《埋蔵文化財》は、私たちが未来へどう進むべきかを考える時の、大きな足がかりです。保存し、将来の人々にも伝える必要があります。大地に埋もれた遺跡は、一度破壊されてしまうと決して元通りにならず、その土地の歴史が消え、人類の歴史に空白を作ることになります。破壊を余儀なくされる場合は、将来でもわかるように十分な調査データを残しておくこと、それが、現在の私たちにできる、最低限の役目なのです。

## //// [資料紹介コーナー] //// 遺物からの「発見!!」

### 【弥生時代＝本当に稲作の時代?】

弥生時代が、稲作によって花開いた時代であったというのは、今や周知の事実とされている。しかし、まだ日本に文字がなかったこの時代、「大陸から稲作が伝わった」と書き残せる訳ではなく、また2000年を経た現在、当時の米が見つかるという幸運などにもめったにお目にはかかれない。では、なぜそう断言できるのであろうか。

根拠の一つは、本当に“偶然”の賜物。籾が落ちていたのです、土器を作る粘土の下に!!。

そしてその圧痕が、土器の底にそのまま残ったというケース。特に弥生土器の底によく見られ、稲作の大きな証拠となっている。

最近では、炭化した米の発見に加え、稲穂のままみつかった例さえもある。また、弥生時代の土壌を分析し、抽出された稲の花粉を手がかりに実際に水田が発見されている。



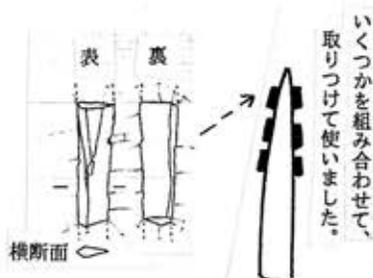
附属養護学校敷地内 出土 籾 3/4

この【籾あと】や【炭化した米】は、ただいま展示中です。自分の目で発見しませんか。

# 昭和62年度の調査 速報!!

(報告書は昭和64年3月刊行予定)

- ★ 教育学部 附属教育実践研究指導センター敷地の調査 (6~8月) ……弥生~古墳時代の貯蔵用施設。旧石器・縄文時代の石器。縄文時代以前の植物種子・樹木。
- ★ 教養部 複合棟敷地の調査 (9~12月) ……縄文時代の大河川と狩り用落とし穴を確認 (類例の少ない、貴重な発見)。弥生~古墳時代の竪穴住居。古墳時代の川。江戸時代の掘立柱建物、井戸、肥料だめ。各時代の土器(陶磁器含む)・石器(主として縄文時代の石鏃)の他、井戸からは植物・木材や骨片、寛永通宝なども発見。
- ★ 医学部附属病院 病棟建設予定地の調査 (2~3月) ……旧石器時代の石器多数。時期不明の貝殻多数、サメ歯。



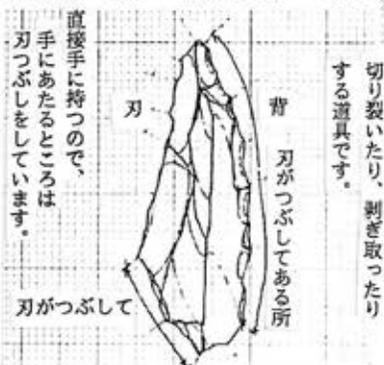
さいせきじん  
〔細石刃〕 略図 実物大

教育学部附属  
教育実践研究指導センター敷地の調査



〔狩り用の落とし穴〕

教養部 複合棟敷地の調査

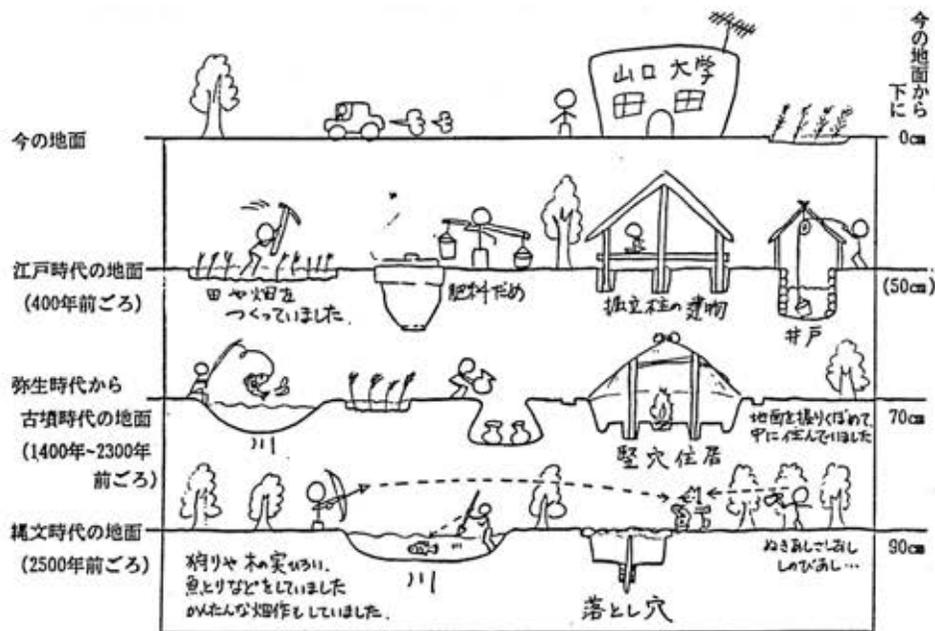


〔ナイフ形石器〕 略図 実物大

医学部附属病院 病棟予定地の調査

## 例えば、教養部 複合棟の建設地。

地面の下には、このような歴史が埋もれていました。



# 『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』 発刊 !!

当館では、学内の遺跡調査を1年分まとめ、『年報』として毎年刊行しているが、本書はその六冊目にあたるもの。当館での貸し出しはもちろんのこと、他に学内では各学部の事務部、また各キャンパスの図書館に置いてあり、学外でも山口県立図書館や県埋蔵文化財センターなどに備えてある。ぜひ、ご覧下さい。

〔主な内容〕 今回は、昭和61年度の調査成果である。

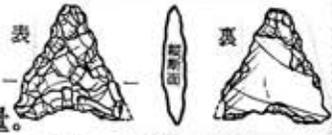
- ★ 国際交流会館敷地の調査……弥生～古墳時代に流れていた大きな河川を確認。
- ★ 亀山の山口附属幼稚園・小・中学校内（公共下水道の配管予定地域）の調査……

幼稚園…弥生時代の土器。室町時代の土壌。

小学校…古墳時代初めの土器多量。

中学校…縄文時代と、弥生時代終末期の土器・石器多量。

室町時代の大内氏専用の土器。



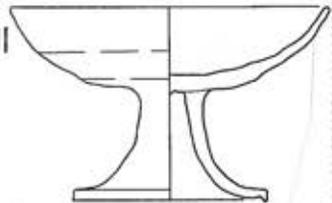
〔石鏃(石製の矢じり)〕 実物大 山口附属山口中学校敷地内 出土

- ★ 遺跡保存地区（昭和59年度）の調査……

弥生～古墳時代の竪穴住居10棟、古墳～奈良時代の河川

などを確認。弥生～奈良時代の土器・石器多量。

ナイフ形石器（旧石器時代の皮剥ぎ用石器）。



〔須恵器をまねて作った土師器 高環 7世紀〕 遺跡保存地区 河川跡 出土

- ★ 古墳時代の竪穴住居についての論考。（河村）

- ★ 山口県内の旧石器時代遺跡についての論考。（木村）

\*\*\*\*\*  
 \* 本冊子は、各講座、教官に一部ずつ配布していますが、ぜひ学生個人でもお持ちい \*  
 \* ただきたいと考えています。当館で配布しておりますので、ご希望の節は気軽に \*  
 \* 館下さい。また、各学部事務室にも置いてありますので、ご自由にお取り下さい。 \*  
 \*\*\*\*\*



## 編集後記

本学教職員、学生と埋蔵文化財資料館を結ぶ機関紙「山口大学埋蔵文化財資料館だより」の創刊号をお届けします。本冊子は資料館の企画と事業等を広く紹介するとともに、当館が有効に活用され、かつ埋蔵文化財に対する理解が深まる編集・誌面を目指しています。ご意見、ご感想またご質問など、気軽にお寄せ下さい。

山口大学埋蔵文化財資料館だより

No.1 〔創刊号〕

発行 昭和63年7月6日

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

〒753 山口市大字吉田1677-1

☎代 (0839)22-6111 内線299

開館時間 (平日)8:30～17:00

(土曜)8:30～12:30